イラストレイション=花井祐介

STRING THEM ALONG

ストリング・ゼム・アロング

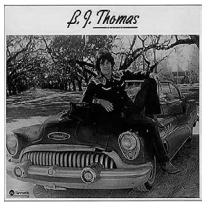
文＝ジョージ・カックル

第3回

浮気や不倫をテーマにした〝チーティン・ソング〟

アメリカのポップ・ミュージックにはジャンルに関わらず、‘cheatin”=浮気や不倫をテーマにした‘cheatin’songs’が山ほどある。それを裏づけるのが、B・J・トーマスが歌い76年に全米シングル・チャートのナンバー・ワンに輝いた**「心にひびく愛の歌（[Hey Won't You Play] Another Somebody Done Somebody Wrong Song）」**だ。タイトルは直訳すると、《おい誰か、誰かが誰かに悪いことをした曲をかけてくれないか?》。つまり、浮気がテーマの曲をかけてくれ、という意味だ。そんなリクエストがタイトルになるほど、この手の曲は多い。

ちなみに、ラリー・バトラーとチップス・モーマンが作詞作曲したこの曲には、グラミー賞の〈ベスト・カントリー・ソング〉が与えられた。ところで、この曲の邦題の「心にひびく愛の歌」には、皮肉が込められているとしか思えないのだが（笑）。



B.J. Thomas “Reunion”
ABC［US］●ABDP858［1975］
➔ユニバーサル◎UICY3379

incl.‘(Hey Won't You Play) Another Somebody Done Somebody Wrong Song’

●

まずはドアーズの**「バック・ドア・マン」**から始めよう。67年に発売されたデビュー・アルバム『ハートに火をつけて（The Doors）』に収録されているこの曲のテーマは、ずばり〝間男〟だ。《人々が寝ている真夜中、夢を叶えるために俺は外に出てきた。なぜなら、俺は〝バック・ドア・マン〟だから》とジム・モリスンは歌う。この曲は、61年にハウリン・ウルフがリリースしたウィリー・ディクソンの曲のカヴァーで、ドアーズ版ではセカンドとサード・ヴァースは全く歌われていないが、ウルフのオリジナル版には《朝になって鶏が鳴いたら、俺の去り時だ》という歌詞がある。間男が家を出るときは玄関ではなく裏のドアを使うから、曲のタイトルが「バック・ドア・マン」。実際にアメリカ南部では、

The Doors
Elektra［US］●EKL4007（mono）/EKS74007（stereo）［1967］➔エレクトラ（ワーナー）◎WPCR13280

incl.‘Back Door Man’

©George Cockle / Record Collectors

既婚または彼氏がいる女性と浮気している男を指す言葉として使われている。

ただでさえアクの強いモリスンに、《お前ら男どもがポーク&ビーンズの夕食をとっている間、俺はいい女をたらふくいただくんだ》と歌われると眩暈を覚えてしまうが、この曲にはもう一つ有名な歌詞がある。‘The men don't know, but the little girls understands’=男どもは分かってないが、可愛い子チャンは理解してるぜ。つまり、女性が想像以上にセックスを欲していることを男たちは分かってないと歌っている。それを〝理解〟している自分を誇示しているわけだ。ウルフのオリジナル・ヴァージョンでは、看護婦、判事や警官の妻といった、本来ならば自分の手には届かないような、恐らく白人の女性をも虜にしてしまう自身のヒーローぶりが歌われている。機会があったら、ドアーズ版と比べて聴いてみてほしい。

●

浮気といえば、相手に踏み込まれることも少なくないだろう。次はそんな曲。レイナード・スキナード**『ギミー・スリー・ステップス』**は、リフがかっこいいアメリカ南部の雰囲気に満ちた曲だが、歌の主人公がバーで女の子と酒を飲んでいると、その女性の彼氏が入ってきて拳銃を向けられてしまうという話だ。歌は‘I was cutting the rug’という一行から始まるが、これは絨毯を切っているのではなく、踊っているという意味。そしてピストルを持った男は‘You know who’を探しにきたという。この‘You know who’=はっきり言わなくても相手に分かる人、つまり拳銃を向けられた男のことだ。《おい、髪が黄色いお前、何をしようとしている? そいつは俺の女だぜ》と凄まれた主人公は、《俺はキスすらしていないんだ、あんたと問題を起こしたくない。だからひとつだけ頼みがある》と弁明する。ここからコーラスが入って、‘Gimme Three Steps’という曲のタイトルが繰り返される。《3歩でいいから歩かせてくれないか? そしたら二度とあんたの前には現われないよ》。拳銃を持った男が彼女に怒鳴り始めた瞬間、主人公はこう叫びながらドアから飛び出ていったというストーリーだ。一瞬にして天国から地獄に落とされた男の様子が活き活きと描かれユーモアも感じられるが、もしかしたらメンバーの実体験に基づく内容なんだろうか。

この曲を聴くと、いつも頭をよぎる恐怖の思い出がある。それは俺がアメリカで撮影のコーディネイションの仕事をやっていたころのことだ。コピー機の撮影のために、ある会社へ行った。するとそこには、『プレイボーイ』に出てきそうな、すごくグラマーでセクシーな金髪の女性が秘書として働いていた。俺より背が高くて、足首には小さなタトゥーがあった。それは当時のアメリカではストリッパーに多かったから、あれっ?と思ったのだが、とはいえ仕事は無事に終わり、その後、彼女のことはすっかり忘れていた。すると数か月後、突然、彼女から電話がきた。食事に行かないかというデートの誘いだった。俺はもちろんすぐにオーケーして、何日か後に彼女の家に迎えにいった。家の前にはかっこいい赤のコルベット。タイ料理店に行って楽しく会話をしていると、彼女が自分の元の彼氏のことを話し始めた。別れたばかりの彼がま

Lynyrd Skynyrd
“Lynyrd Skynyrd”
Sounds Of The South/MCA
［US］●MCA363［1973］➔MCA
［US］◎088 112 727-2

incl.‘Gimme Three Steps’

だ彼女に未練があって、今もしつこく家まで来ているという。ちょっと暴力的な男らしく、その仕事を尋ねると、なんとプロレスリングのセキュリティーだという。しかも身長は彼女より大きいというではないか。そこで俺は急にその場から逃げたくなった。目の前にはグラマーでモデルみたいな美女、でも俺の頭の中では「ギミー・スリー・ステップス」が流れていた。

どうにか食事を終わらせて、彼女を家まで送っていった。玄関まで連れていき、さよならを言おうとしたら、家の中に入ってと誘われた。仕事が残っているからと言うと、彼女は俺を抱きしめて、キスをしてきた。そのディープ・キスは、ただのさよならのキスではなかったね。でも俺は、いつ彼女の元の彼氏がやって来るんじゃないかと思いヒヤヒヤしていた。もう逃がしてくれ！　やっと彼女の手と唇が放れると、俺は自分の車に向かった。その間も、頭の中では「ギミー・スリー・ステップス」がガンガン鳴り響いていた。バックミラーを見ながら、ありったけの力でアクセルを踏んで、急いで逃げ帰ってきたんだ（笑）。

●

浮気していた男が自身のアリバイを言えずに、殺人犯として死刑にされた哀しい歌もある。ザ・バンドが68年にリリースした『ミュージック・フロム・ビッグ・ピンク』に入っている**「ロング・ブラック・ヴェイル」**だ。これはレフティー・フリゼルが59年にリリースしたカントリー・ヒットが基になっている。この曲の歌詞は、死刑を執行された主人公の声だ。人殺しの犯人に似ているせいで裁判に呼ばれてしまった男。彼は殺していないが、裁判官にアリバイを聞かれても、何も答えられない。なぜかというと、その時間に彼は親友の奥さんと浮気をしていたからだ。だから彼は二人の秘密を自分の墓場にまで持ち込む決意を固め、何も語らず絞首刑を受け入れた。男が庇った女は、黒いヴェイルをまとい人目を避けて、死んだ男の墓参りをする。≪俺が首吊りにされたとき彼女は泣かなかったが、冷たい風が吹く夜は、黒いヴェイルをまとった彼女が俺の骨を涙で濡らすんだ≫。

The Band
“Music From Big Pink”
Capitol［US］◎SKA02955
［1968］➔ユニバーサル
◎TOCP95106

incl.‘Long Black Veil’

●

浮気しているカップルの心情を歌った曲といえば、**「ザ・ダーク・エンド・オブ・ザ・ストリート」**。これはダン・ペンとチップス・モーマンが共作したソウル・クラシックだ。67年に発表されたジェイムズ・カーの代表曲。全米R&Bチャートで10位になった。様々なミュージシャンによってカヴァーされているが、ダン・ペンは27年後の94年に、自分のヴァージョンをアルバム『ドゥ・ライト・マン』の1曲目としてリリースした。≪通りのはずれにある暗闇、そこは俺たちがいつも会う場所だ≫という歌詞で始まるこの曲は、浮気＝罪だと分かっているがやめられない二人の関係が歌われている。コーラスに入ると、二人の過ちはいつかばれてしまうだろうと繰り返され、愛の強さゆえに関係を断ち切れないでいる

Dan Penn
“Do Right Man”
Sire/Warner Bros./Blue Horizen
［US］◎9 45519-2［1994］

incl.‘The Dark End Of The Street’

©George Cockle / Record Collectors

互いの苦悩が表現されている。その後にくるサード・ヴァースでは、昼に偶然二人が街で出会ったとしてもお互い知らんぷりして歩いていこうと歌う。≪お願いだから泣かないでくれダーリン、今晩、通りの外れの暗闇でまた会えるのだから≫。一番いい‘cheatin’ songs’を書こうと思い作ったというダン・ペンの、魂の名曲だ。

●

浮気しているふたりの心を描いた歌といえば、こんな曲もある。ビリー・ポールが72年にリリースし全米R&Bチャートだけでなくポップ・チャートでも1位となった**「ミー・アンド・ミセス・ジョーンズ」**だ。作曲はケニー・ギャンブルとリオン・ハフ、キャリー・ギルバート。この曲の中の男女は、いけないこととは知りながら、毎日6時半に同じカフェで会う関係を続けている。ジュークボックスがふたりの一番好きな曲をかけている間、手を絡ませいろいろな計画を話し合う。別れるのはいつも胸が痛むが、互いに戻らなければならない場所がある。それなのに、また明日、同じカフェで同じ時間に会うことも分かっている…。

単なる不倫というだけでなく、異なる人種間の関係も連想させる曲だが、普通に聴いていると二人の逢瀬はこのまま永遠に続くように思える。しかし、曲の終わりに出てくる言葉に注意すると、二人の関係が実は既にばれてしまっていることが読み取れる。‘We know, they know, you know and I know that it was wrong’＝僕たちも分かっている、彼らも分かっている、あなたも分かっている、そして、僕もいけないことだとわかっている。どうしようもない胸のうちが伝わってくるフェイドアウトだ。

●

最後は、タイトルからもわかるような三流の不倫劇を歌った**「サード・レイト・ロマンス」**だ。これはアメイジング・リズム・エイシズの75年のデビュー曲。この歌に出てくる二人は‘Ritsy Restaurant’というおしゃれな店で会い、女はコーヒー・カップを眺めていて、男は勇気を借りようとして酒を飲んでいる。‘talk was small’＝たいした会話もなかったが、お互い何が欲しいか分かっていたし、ちょっとつきあってみようと思っている。こんな一節もある。‘You don’t look like my type. But I guess you’ll do’＝あなたは私のタイプじゃないけど、どうにかなるでしょう。すると彼は≪愛してると言ってほしかったら言ってもいいよ≫と答え、それから二人でモーテルに向かう。彼女は何のためにきたか、ごまかす必要がない。彼女が部屋を鍵で開けるとき、≪私はこんな経験ないけど、あなたは？≫と訊ねると、≪あるけど一回か二回だけだよ≫と彼は答える…。

本当に安っぽいけど、すごく流行った曲だ（全米14位）。人の心にひっかかるものがあるからだろう。みんな、大なり小なり浮気願望があるのかもしれない。浮気や不倫は、人の心を揺さぶる永遠のテーマなんだろうね。RC

Billy Paul
“360 Degrees Of Billy Paul”
Philadelphia Int’l［US］
◎KZ31793［1972］➔BBR/ソリッド（ウルトラ・ヴァイヴ）
◎CDSOL7784

incl.‘Me And Mrs. Jones’

Amazing Rhythm Aces
“Stacked Deck”
ABC［US］◎ABCD913［1975］
➔Real Gone［US］
◎RELM400155

incl.‘Third Rate Romance’